平將門退治圖會 七

へ13
3296
7

へ13
3295
7

平將門退治圖會六

起天慶三年七月
至同　四年二月

第十三　純友兄弟出張

附　豊前國所々合戰

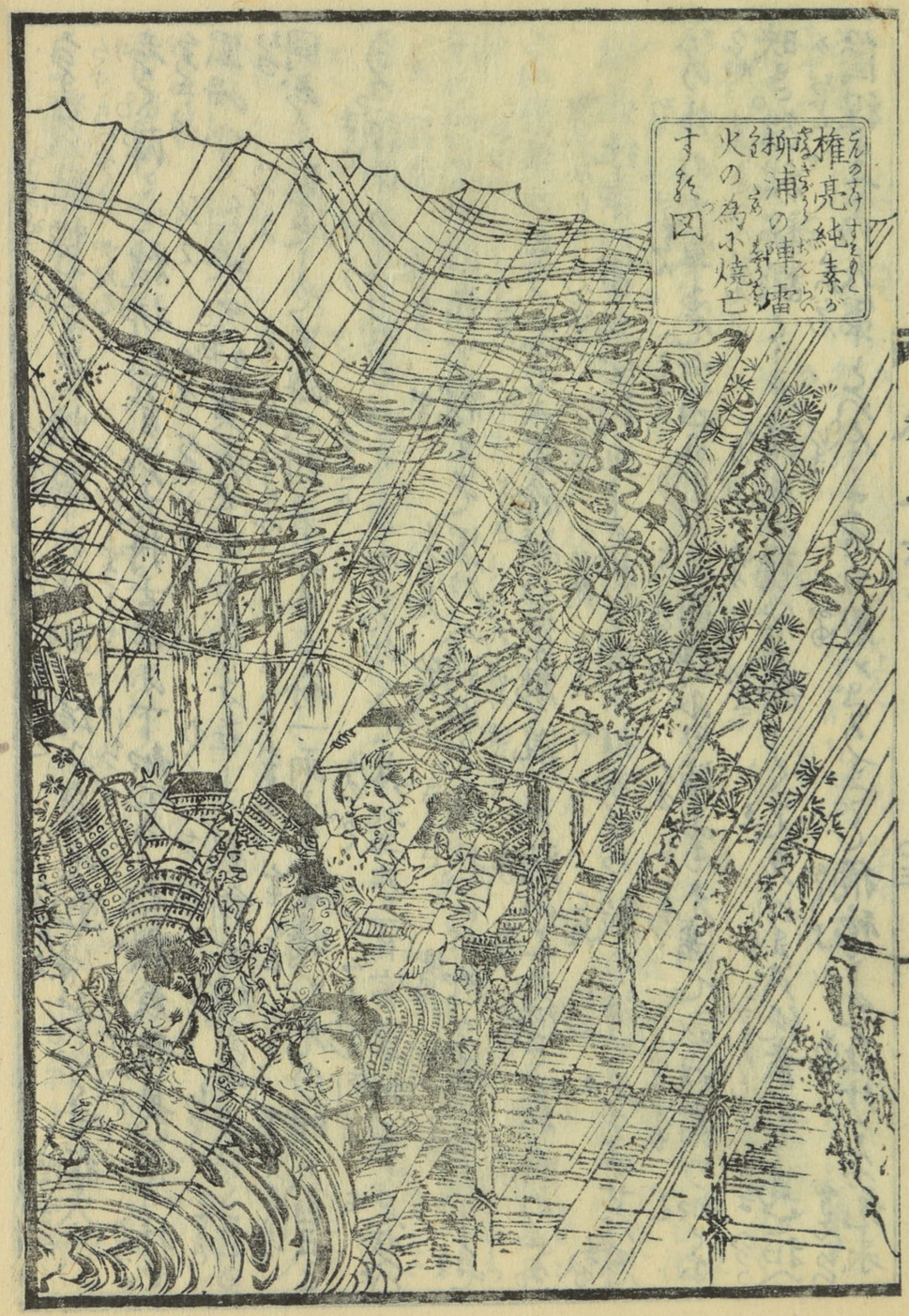
去程ハ天慶三年庚子秋七月九日。追捕使小野好古源経基王諸軍勢を率て長門國ハ著の人船ゑ所ハ河波守保衡ハ周防ハ獲種大内ハ康後らの搦手の城攻落し。賊將舟木輝義ハ首級及び生捕草壁良連。その他宗徒の首級七ツを献ず。落城の容を言上せ。あ大將大ハ感悦あり。中ハ大内ハ康後ハ智謀中山ゑ次ゲ功を第一とすべしとて。大内ハ康後ハ太刀一振を賜ひ。次ハ物具一領を賜ハりける。あ人面目を施し。退去ハ次ハ所の城へ射ひる人々ハ忠賞差あり。斯て生捕草壁ハ下津の湊へ引出し。首を切て梟

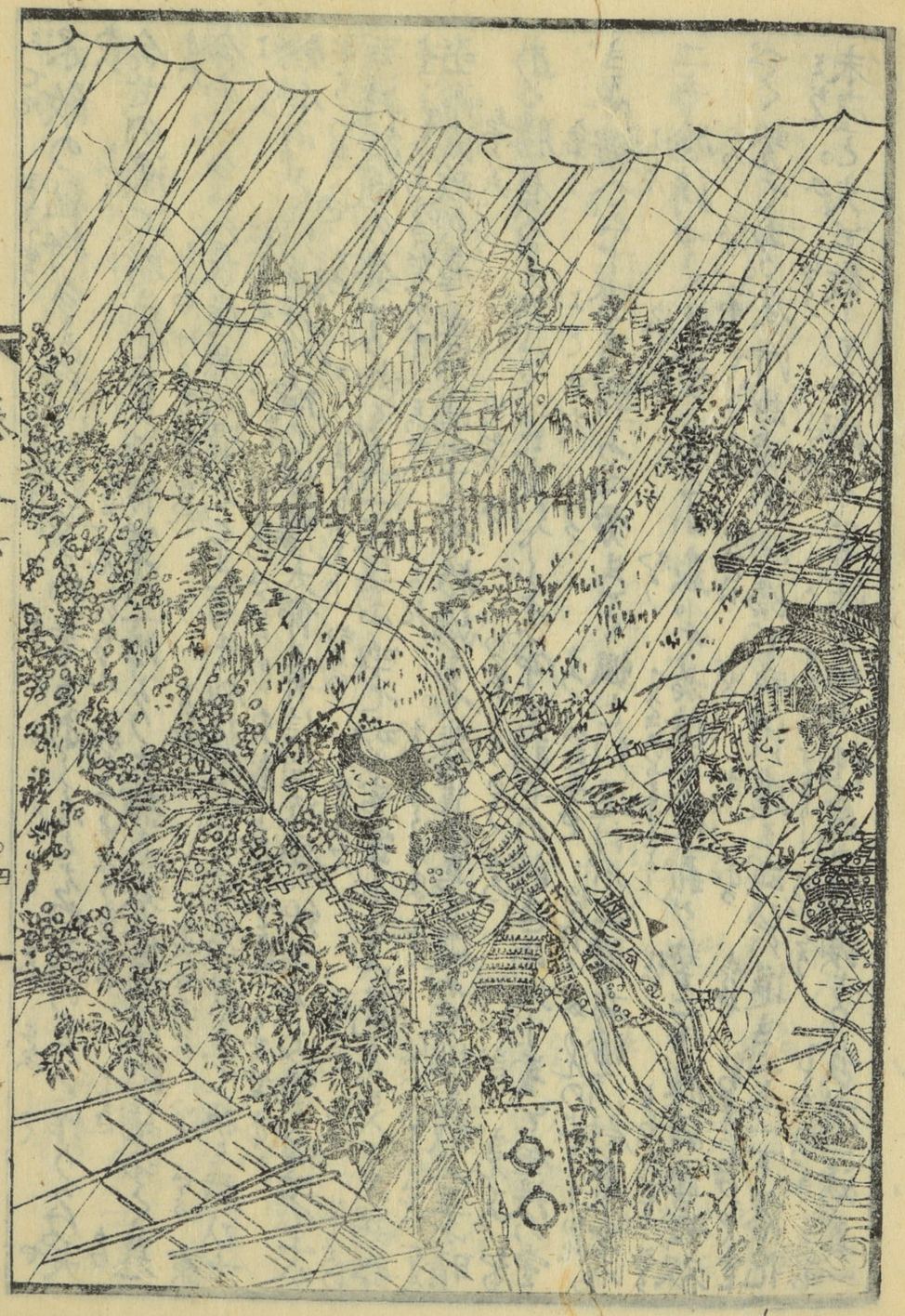
大正十年八月廿九日
本大學圖書部
贈

木の葉軍神を祀らまとけり。爰に長府の城に籠り。稲村平六景家、純友が肱股耳目の者なり〜〜。樋田既に落城のあらび官軍當國へ移りぬと聞き折ふし兵勢なりまとべ。斯て六一日も脉えがしと密に滅て敗て太宰府に帰りて。さて如此さのみ一斉〜けるに不順敵て責んとて軍勢四方へ領ち遣べ。宰府に殊に兵人なり。如何いぜんと思ふ処に。肥前の國に向ひさる。舎弟右衛門佐純素同四郎太夫純正。一万五千除詩を凱陣なー豊後の國へ向ひさる。舎弟権亮純素。二万除詩て引卒〜。ことの勝軍〜て帰り来るとべ。純友斜ならぬ歌び。軍の異見を問まとけるに。純素が〜の沉吟に及び。事もなげに言さけるに。の様に様てなり覚悟のことを。今更驚くべきにあらび。殊に此筑紫の地に残らも當家の有とあるて。大貳公頼のを侵なを。筑後の國に在とも。這奴何程のことなり。仕出さん。然いと官軍に向ときとべ。時城得て害てみさんと。然まべ軍勢かくさーに向け。柳川を圍ませて。一人も漏さぬやうに構え。我々は豊前の國柳が浦に出張〜〜。官軍をこちらに受水戦に馴ぬ京家乃奴原を一〜海底へ切出べ。逆賊慰なるべーとを。頼て軍勢の多分を定め。右衛門佐純素に千騎ばかりを相副て。大貳公頼が籠りなる。筑後の柳川を圍ませ。権亮純素に二万騎ばかりを引卒〜て。柳が浦に陣をとまべ。前伊豫掾純友は史より四里引下り。筑前の國宗像に四万除詩を固めさり。かくて官軍の諸大将軍議評定あり。けるは。這回宰府を攻んとせば。敵は宮殿を博多の津沢箱崎を相後らんと。その術計をなーるに思ひの外に柳が浦まで出張ませーとの風聞あり。官軍元来水戦に。馴ぬのの多りまとべ。大筏を組さー。平場の如くに拵へて馬の蒐引進退を。自由にあるさーめんと評定あり。頼てその准備をせられる純素

古より紙傳え聞く。然らば此方ゐも術計を更て防ゐやとく。拾章紙集め。油硫黄を沃ぎうけ。投炬火を蔵千もゐく山の如くゐ拾へくかの大筏ゐく寄来らば。四方八方より投懸て。焼打ゐせんと構えうゐ。然るゐ同月廿一日。波浪怒光明神の社鳴動してその音崩るゐ如くゐまば。社人等ゐ警護周章。こゝ何事の祟りゐ欤と。卒ゐ奉幣祝言して。神威を鎮めなゐ然るゐ其日未の刻頃一天暴ゐ掻曇りて降雨盆を覆すゐ如く。頻て波浪怒光の社より三圍の車輪の如き火光出ると見えうゐ。雲中ゐ狭まて。鳴雷霹靂こと凄ゐく。世界さで真暗ゐなりゐく。山河も一変ゐ滅まるゐと。諸人肝を冷し色を失ひ。更ゐ生ゐ心地なし。電光頻りゐ晃いく。純素の陣中人雷墮かりけゐゐ。彼投拒火ゐ火燃つゐく。陣く没所ゐ移りけゐ。軍兵等いさ騒き。火紙消さんと拠けども。頭上ゐ電映き渉り。鳴神打潰ゐ如く

なるとゐ。戰慄恐まて惟幕の陰ゐ一緒ゐなりて動揺ゐ。かくて猛火燃ゐ来く。陣こと焼拂ひ。ゐゐ大将士卒ゐ下知てゐく。武器雑具とり拾せ黒崎へと引退き。伊賀寿太郎もゐゐ在しゐ。没所て焼まて力ゐく。是ゐ同ゐく引退して黒崎へ到着すると。森一雨止を雲晴て。元の晴天白日となる。誠ゐ希有なる一奇事なり。かくて其翌廿三日。官軍拝者て。えゐゐ敵ゐ雷火ゐ陣所て焼まて。黒崎へ引ねと。図然らば柳ゐ浦へ上るべしと。大筏ゐ乗て。六万除騎の軍勢混こと陸ゐ上り。陣くすゐ固めうゐ。拝充純素ゐ軍兵て引率して。柳ゐ浦ゐ拝者せゐ。敵の陣て見こと。せば思ひの外の大軍ゐ。方四五里ゐ其間黒ゐも漬ゐも充満て。敵戦霜の如くゐ映き。雑旗翻翻こて濱風ゐ靡へり。駿しくえけまば。純素かゝ馬こ扣へ。箇程ゐの大軍こゝ今まゐも思いざりきと。摘豫して在けるゐ。元来


権亮純素が
柳浦の車雷
火の為に焼亡
す絵図



不敵の猛将なるべし。這何ものの事ぞあらんと、やがて門の声を作りて矢
合せの鏑を射させ給へば。官軍の一陣より大蔵丞春實が千騎ばかりゆく葛
合むこと。あるべき長屋源八廣之。是とも千騎ばかりゆきて桃を戦ひ十
除合みなく引退けば。後に伊豫太郎有信同次郎純年が勢合せて千八
百騎旋風の発する如く。真一文字に呼てかく。官軍もまた荒武者入り交る兵部
丞源満政兵庫丞同満季二千騎ばかりゆき。蔦直ぶ馬を進めて桃を戦ふ互に晴
なる勝負なるべし。で一足も引じとして。命を羽毛の軽きに比し。義を金鉄の重
きに擬へ。二十除度戦ふて。労まとく颯と引退けば。二陣右馬の門尉慶久幸ハ。
二千除騎ばかりにて出る。是とも義家の長男左兵衛尉義綱が勢二千騎ばかり双
べく撃て出る。長汀曲浦の砂洛を或ひは進み或ひは退き。一上一下落花
未塵と火を散して戦ふる。活る処に純義が陣頭より武者一騎。真一

文字に馳出さる。諸人雑ぞと見返るに。安藤の圖の絵人なり。金剛十郎知
恭と号す。関西一の剛の者。相模にもかくも聞ひゝ。我と思ふ人々ハ。寄
きや組んと大音あげ。傍若無人に詈ば。官軍の陣よりも。安藤越後
十郎光利と号す。會釈もなく蒐合せて。二打三打撃ちたれども。何とも
なけれ。安藤が。然る馬を折傷て。縛ゞとするわざに。安藤が恥さんと
する処に。金剛十郎安藤が。兜の緒を返して。あくまで。続打に打ばば。吹返し外れ
ぬ。弓手の方を斫下らば。二言ともなく死でぬ。光利が郎従十二騎。是を
見るより。池寄て主の敵と。遮取巻物くーやと。金剛十郎。十二騎を引受く。
右を突て左を薙。瞬間に六騎斗り。馬より倒れ切て落ぬ。その挙動
ものくふ。凡人の業とは見えず。敵も味方も引靡て。一騎當千の勇士と
見る人々ハ。ふるふ〳〵と。舌を捲て見物なり。討遺されぬる郎等ども。各

傍輩まで討せ。何面目か後へやうんと。捲り立て切はる紙受け外しの測て削り。流る汗か澄城浸し。遂つる迄の戰ふ程どか。遺る郎等も五箇所六箇所。深痛て負ねかるうけるぞ。猶一足も退く沢滴る血しほか咽紙潤し。命限りと責戦ひとか。金剛十郎知恭も了浮金鉄の甲かのあくれば。痛痍数多負て気力痩き。腕とあるとろ紙浮さりや疲と。折重なりく討留ける。夫より後い諸國の勢千騎三千騎入交り。孔軍時て稍くけるか。純素か勢か引けん。竟か打負て引退き紙。好古朝臣勝ふ家て。北ろ紙逐ふと甚急ぎ。経基公こと紙ふて。長逐いを益なり。却て味方の敗ととうくんと急ぎ使者て立て好古朝臣か如さとやふ。好古朝臣も尤と同じ。軍を緩めて本陣へ引退きめひけり。尚この時渋を慕ふて。何方ぞも逐蒐ふ黒滝の荒を。よて出ん。味方か今朝より數箇度の軍か戦ひ痩き。この共ふと必宣敗北

共と表経基王の奏ーぬひて。斯か計らひのひーさそ。斯て権亮純素か敵透間もなく逐蒐べたと半途めく止まりーか必宣続て責寄ん。計器かとそあべなと。遊莫思ひもつねこの所か待受て攻ふ来て慰さうんと。山際か添て野陣て張人馬の足て休まーて。日の暮ろ紙疲てけり。斯ともかくふ好古朝臣か今日味方の勝軍か心中大か驕て生じ。とて紙の敵恐るくか思らべ。この威勢か黒滝へ責つけ。で一揉か純友て虜捕か做さんと勇ぶ。諸方の味方へも牒ど合せ。二方か後ふ。引卒して。北ろ紙の月と共か柳か浦て打立て黒滝へと對ひの人千兹権亮純素か胸ふ逸か仆候て出ー。其動静て窺ふ。仆候の地帰り。敵ろそかや数方の軍兵月か映じて見えひし関て純素陣くか。下知て待えてあるか分ち。相図て宣めて待蒐ふ。好古朝臣かこの頃か敵の在と。一点知らべ。義松の浦か懸りあるか。時分か紙ぞと純素か勢。思ひも

寄ね前後より。二万又千騎諸一同に。喊と喚て蒐立れば。官軍にも度紙失ひて。取次ぎ乱れ立て。対する者数を知らず。おくに好古が先陣大藏春實右衛門尉慶幸にも千騎諸を三隊に備へ命を惜まず防ぎ戦ふに於て好古朝臣懸て中を直し一廻に捲つ責戦に然れども官軍に不意を撃て且て初めより。狼狽する癖なれば。純素が勢に蒐立て。追ひ立て見えにける。却説経基王が陣中に待ひけり。箕田滝口仕といへる老功の武者なりしが。昨日純素が退いに。雑式松夜叉友夜叉と云ふ恐びの者を入とけるが。松夜叉その夜立帰りて。敵に異変へりと思ひの外。若松の浦の山を小副て。野陣を張ていたりに。折ふし小野好古朝臣。味方の諸将を出し拔て打ぬ人と聞めるに。宜めて敵の計策に陥のかりにん。不審きとと思ひ。振るふたの暁夜夜又端く乗ぬ。官軍演名紙押めに。純素が勢に不意を撃て意に出。引包て討んとに。味方大勢なれば。礼も出大将も悪く。在すれば。勢を知らば頻知らしに。家らせんとて直に参ぶていと。遠く言ひて。仕に聞て然もこそあき好古朝臣敵紙侮り。掲歌功に満へんとて。牒ど合せを打ぬに。不義に不義に忠信薄し。敵に心の思へども。まづ副将軍にのと紙。言上すへしと経基王の西本陣へ参りに。如此ぞのよう紙演れまに。経基王聞のひ如何ぞ忠義に情なる。行ひなれど吾へ。朝のあん擇に興て賊徒逆罰に下りに多なり。假令人義なれば。吾弁に偏執を懐き。味方の濃の居なり慢んやと。嫡男左馬助満仲を先鋒の大将として。箕田仕加藤童光を左右に副て一万除兵を授らと直に進発ぶさしめけり。経基王は二万騎の軍兵を後て外の上朝に豊前国桁が浦を打ぬに。左馬助満仲は若松の軍を

関探が探で弛するかどみのまぐ東雲明離まぐ風が。義松の濱が到り
着き。白旗を吹靡かして。法の如くが陣取がが。好古の兵こそ張つて。漸が
撫て来ー。勇を進ここく責戦ひ。且くありて荒を解り。退いく息休む。
純素が見て視て。急地備張南頭が。ろ亜ーく滿仲が陣頭が射ひりが。滿仲
若年といへども。天が稟ける宏才まて。陣の濱かう馬の足足。尋常の将が
あらぬ。左右まが箕田及加藤各老功の智将ろまば。揆く整くとして佐え
関孫吳ぐ兵張関ろが。見まが過ぐと覚えさまば。その威自然厳然さう。
純素ぐ勢こそ張視て。未ぐ戦へざる先が備崩て見えがり。箕田の仕下
知をなー。ぐりの射を揃へ。矢かく射うけさしが。敵こそ張支えも
せば。八張捕が隠き避加藤重光ろまが張視て。ぐき対取ること。下知張ー。
二千騎ぐ一所が纏め。敵の陣へ弛向ふ。敵へ一支えも支え得ばぐあれ

五張退つ撥つ。ぐ痛く責蒐こうーうべ。大軍一勢が崩ぐとぐ。
さーく引ぐが。純素頻りが麾張うち振り。逃せ度せと呼ぐぐど。
多く耳が関入ぐば。純素も雑方盡引ぐく味方の勢が牽れて。黒
傍へぐ面ーける

第廿四 黒崎合戦同退口

附 左馬助滿仲殿

干葉伊豫掾純友が當月十六日ろうまの新が出濱して。舎弟純素ぐ新ぐ
浦ぐて。官軍ぐ支ぐる間が。新が瀬ぐ構えさう。最火急のとみして。坂へぐ一重
あれど。渡櫓高櫓が十方が撥ぐべ。濱の奏さ十間ぐう。海水張湛えれば。
天晴ぐ双の要害ぐう。ぐて官軍いとの程の戦ひが。馬とりが労ぐうば。
今日ぐの新が陣ぐ張ぐ。明廿六日ぐ黒崎へ寄らぐと

交野荒太郎時澄
遠山左二門三郎
宗持
斛の先後を
争ふ

諸大将評議あり。薄くへも觸られける。粤交野荒太郎時澄遠山左三門三郎宗持い好古朝臣の麾下ゐして。陣屋を双べてありけゐ。折しも七月下旬ゐして。殊暑多く胃し。頻に蒸ぐ如くあるとゑ。交野ハ遠山ゐ陣へ来り。四方八方の物語ゐや時を移しけゐ。遠山ハ何とやらん心地悪れゐ様とえけるとゑ。交野ゐの客をえて。ようやく長物語して。人の気を屈しうと思ひ哦をして。遠山ゐけゐ。然るも昨日の合戦好古朝臣の行縢拙く。敵ゐ不意を仕掛られ。散々ゐ敗北し源氏の軍ゐ助られしゐ。遠くも残念なり。明日黒川の合戦を。外の刻の手合せ。大将より下知あるとど。我人接戦して比類なき働をなし。敵味方の眼を覚さんと肚裡ゐ思案して。寝所へも入ずそのまゝゐ蹴三手遣可をゐ卒して。黒川へ向へんと。下僕をして遠山ゐ。陣所を候へ申ろゐゐ。下僕頼ゐを受て。人一人も居らぬとゐ。情ハ甲斐ゐ心地悪とゐ。ひそうゐ虚言

ゐて。抜懸をせん巧ゐゐを出し。接まさう念ゐさと直ゐを弊をゐ卒して。居候さして地さうけゐ。遠山宗持ゐその心中。交野ゐ思ゐ所ゐ違ゐ。因て抜懸と思ひ居しゐ。交野ゐ何とやら。同ゐ容ゐ思ゐとれへ態と心地悪と抜露して交野ゐ陣屋へ飯るゐ。兵糧をつひ直さゐゐ卒し。揉ゐ揉で地さうしゐ。除り刻限の早ゐゐ黒川の此方ゐ。松原の傍ゐ。曽時を移さんと。樹の根ゐ腰をうち掛て。扇ゐを開て納と刻限を量りゐ。折ゐ人馬の音烈しゐ。彼を聞て地来るゐ。北五家の月明りゐ遠しゐ見まゐ旗ゐ。数ハ九三十騎。先くと寄来る。遠山ハ猶心閑ゐ。その動静を窺ゐ。光ゐ。騎馬の武者。松原の方を指と視て。控へ居ゐ。遠山ゐハ称とて見ると。甲斐より心地の例ゐゐと。差りしゐ其容躰を。窺ゐ。落ゐ伺候せゐと。戯ゐ。扇を假とゐ畳を。軍

旅のゆゑ然るべき。西門とそもいつみべ札を徒と五枚兜腰兵粮を用ひ一
つゞ急地臆病の狂醒て心地整くとありけり。遠矢とすると文野時澄馬より内
りと飛下りて。遠山とうち双び扇ばりひて。雲時体をそれ東雲の迫外かくん
去来諸共ゆゑんとて。夫より両人旗ばり立黒侍へ向ひてそろふ門く楯も
寂寥とて。更ゆ人を見如くなるべし。塀際まで馬で乗附。てを天逃捕使のまゆ
屠り。西海の討をゆゑひとる。山城国の住人文野荒太郎時澄。遠山左衛門二
郎宗持なり。鬼神の如くゆらひとて雛も。権亮純素を伴賀寿兄弟の
敵原ゲ。あの城中ゆ在まをるゝ。見番せまく思ふなり。其除郎豊多摩を
我と思ん面くへ。討て出て京勢の武勇のわど成後代の。話柄ともなるよへ
と傍若無人の廣言吐く。再田三面ゆ入て。城中ゆ音も荒。鬨り入て
在れとて。備へ敵ゆ寄らをて。臆しくるゆ城兵等出よくと声の限り罵り

叫べど音もせず。頭て十方の高櫓より。さ一張弓張雨の如く。敵くゆ射
さるをて。札ゆ徒て。一本も裏てかゞ。兎角する程ゆ鏡欲の。
えや山の端も白をるうて。漫くゆ海上ゆ一面金色とるゆ。折柄城
門城押開きて。武者二騎ぞ近出る。遠山宗持佶と視て。霄より数面
なつゆ心臆して出合む。漸敵といふりの成ゆ。見下ゆ誰をと問かく
とて。某ゆ伊賀寿次郎ゲ家の子。柄本孫六兵好なり。跡ゆ續くゆ田中治
平太。ゆで臆しる城兵ゲ。本車のわど成ゆ。二尺ゆ寸の大太刀と
真甲ゆ翳して駆をてかゝる。遠山内りと分て捻り。這物くゆ汝ゲ主の伊賀寿
次郎ゲゆ合ね敵なり。況や汝の分際ゆて。豆向ふる志賀勝なるとて。その首
とて皆く汝ゆ預るなり。早くゆ立帰と。白眼つゆまて所得なるとて。その廣
言て関ゆ来て。時運ゆよりて将となり。浸者となるとも武勇ゆ於て劣り

勝りのあるべきなり。初戦ひ[illegible]血をうりとひひ果さば大きなりて。幾矣[illegible]打
付る。遠山遠きに薙排ふ折〻主ふ組せと。遠山が郎党近入る紙摘れ
うるの脇を伸して。かの帝弓ゴ綿噛捌。鞍の前輪へひ[illegible]付る。遠山微と
地寄て。栖かが兜の[illegible]遠ふ。指をいまて戦やと声ゴ[illegible]
ゴ。弓杖五丈斗り抛除さ。同中泥平太面もふ〻ぞ。交野を同ゴ[illegible]
合。二合三合戦ひ〻。馬より下へ薙おとされ滅兵等
あの帝寄ふ見惑ゴ〻や打ても出ず。さて遠矢るぞ射さうけ。かゴ所ふ矢
合の刻限ゆゆうれまべ。官軍都て八万騎誘大を搦をふ。寄まべ滅
兵もゴ紙先途と。防ぎ戦ふと寸障ゴ。寄を一旦も引退ず。北六日の辰刻刻
より。北八月の申の刻まで。二日二夜息も継ず。攻懸けまど城中ハ無弱る
氣色ゴ。結句寄なの陣中ゴ。疫負死の者も多ゴうまべ。ゴ責口て井

げ。五十騎町引下り。陣〻紙固めく休息ある。元来人の恩ひけゴ。今度西海の
追討使下向ゴ〻ゴ。忽地賊徒亡び失て。国中平定せんと云ひ
ゴ〻ふ。賊徒の威勢巍々然と〻く。更ふ敗走の道も見えず。強ふ[illegible]
長府の城ゴ。純友の腹心ゴ。稲村平六景家ゴ。再指給て浦〻の盛れ
者を語ひ集め。諸方通路へ関を構え。兵粮運送の道を塞ぐ。ふ
於て官軍ゴ屠〻ゴ。兵等ゴ。今ハ運を両端ふ計り。或ひハ病気と故落ど
ゴ。或ひハ俸を左右ふ寄ゴ。已ゲ本国へ引給ゴ。時の動静を候ふ。
初め七月下旬ゴハ万騎誘と関えゴ。八月上旬ふ[illegible]四万騎ゴ
[illegible]ゴ。ゴ分ゴハ如何ゴ〻ん[illegible]と。易き心もゴ〻ふ。兵粮運送乃路
絶て軍中糧ふ乏ゴ〻ゴ。土井庄司頼資軍奉行と〻く。近郷近在の青
稲城苅ゴ。丈ゴ配分ゴ〻れゴ。是さ人今ハ盡ゴふ至ゴ。斯て永く保ち

ぐしと。諸大将うち寄て。評議區くる所ゝ豊前國宇佐の神主宮木
太輔公忠使者を乗らして言はせう。當國菱形山の城へ純素不時の後へゝ
と兵粮米五千俵石大豆二千俵石紙積おこ。今へ由利新三郎朝通手う
ゝ。僅の勢にて籠りゐ。早く山陳を移されく是へ入りゆくまづ兵糧沢
山にて便利なべうと存じゆ此青冥く也賢慮紙廻らさせのへしと信実ゝ
言上さて。諸大将評定あり。如何ゆも軍勢の耗失ると。粮米不足の故ゝ閉
多り。宮木ゞ使者の初ゝ任せ。先彼所を引とりて再び軍繰紙ゐすべきと。
既ゝ一決ゐ。是ゝ順へ八月十八日。黒滝の陳を引拂ふ。是ゝ甲夜まで所々
篝高星の如く輝きゐ。さて一時ゝ消失て平沙暗ゝ寂寥とう。純友の兵
これ見て。敵へ頓ゝ落亡ぬと直ゝ此ゝ紙言ゝ出ゐ。然らばあるとて追
撃とて。混軍一番俵藤伊賀寿兄弟大将として。操ゝ操でぞ追蒐とう。こゝ

官軍へ諸大将道を習て出向き。あるべうゝ紙猶路々ゝ敵ども充満し
とうと関ゝ鄰ゐて悪りゐんとて。都合四万三千俵藤ゝ一陳へ慶幸春
實ゐ千俵藤ゐて打せるべ。二陳へ小野保衡ゐ三千俵藤ゐて打せける。中
軍へ好古朝臣経基王の大将也一族ゐ十俵人。その勢二万八千俵藤浸
陳へ六孫王の嫡子。左馬助満仲ゐて。箕田加藤を左右ゝ侍へその勢
七千俵藤ゐ本陳より。逆ゝ引下りく打せらる。活る処ゝ伊賀寿兄弟。夫
落人て駆留よやとて。曳こ声ゐて地蒐る紙。満仲佶と視てゐ由。後
こそ屈竟の防場ゐるとて。一段高き片岡の西下りゐ小間ゐ精兵ゐ
百人ゐて左右ゝ立。楯の板て雌羽ゝ突双べ矢束解く推乱ゐの法螺
湿ゐ。静り返りく敵て後ゝ陳満仲へ丈ゐて二町斗り引下り。六千
俵藤ゐ二隊ゝ分て今や遅とと扣へとう。敵へ時の声を作りゐ。さて一

揉ふ揉潰さんと。一勢ふ突て蒐る程。縁て殺し左右の射を潜て振へて矢種を惜まじ。雨霰と射う盲じ。敵い是ふ射ちまさと。初めの戒勢うへ似も怯らば。取次ふ多ゆく乱る程。六千騎兵二方より。一田ふ関城作りうけ。捧りをて攻撃るぞ。浮の伊賀寿兄弟も。思ひの外ふ攻徳く。雲時躍廻左けるぞ。

あをとゆどの敵を撃べとて。斯脳まるろ。辺念さよと。備城勇驍ふ立ーて。前後左右を撃ゆどふ。満仲が勢ことゆ。高ふ。抱き磨きて。猛へけり城。其回仕加藤雲光一勢ふ斬て蒐り。命を惜まじ。挑を戦ふ。敵軍の関の声。矢叫びの音。岸打波ふ通ひ。音き。山彦ふ呑へ。天地も崩る斗りうまじ。

彩過さうー中軍の勢。渡陣の軍緯急ぎうと。満仲の舎弟兵部少輔満政馬の鼻を挽回し。三千騎ふ。敵軍を城逆ふ。猛ふ。敵軍を城逆ふ。猛ふ。

大勢と思ひうー。数千の荒手加ろうまじ。闘雑義ぞうべけと。ふの敵の寄ね

間ふ。一容ふ。隊伍を乱して逃る。伊賀寿兄弟采幣うち振り。

ひ甲斐多者共ろ。假令荒手の加ろうも。元来引色の立る武者何

ゆどの事のくんや逃せ度せと。千騎すまども。崩ま立る癖ふれば耳ふ

ゆけぞ引退くぞふ於て伊賀寿兄弟。如何とも詮方ろく。果敢愛ふ敵の

大将。実ふ洪運ろうと。吐きて。涙こと。引田せば。満仲八且て逆ぞ軍を緩て

満政と。巻城双べく打せけり

第廿五 豊前菱形山落城

附 純友兄弟不和

去ゆどふ官軍い黒川の過を切捧り。勝閧三度揚させて。勇を進んぐ

打せゆふ。此色の野伏海賊。元そ其勢八千計り。都が蒲ふまち蒐て。

旗を揉へく射ゆう。光陳右清門尉慶幸。大蔵丞春実真光ふ進ま。

吾々を尋常の諸人へとおりよめ。僥倖にて後悔する。一さゝ有り懸く軍
神ゝ祭らんとのゝ所どこそあるとみ千騎諸。三隊ゝ備へ南北より。蟇地ゝ攻く
蒐る。威勢揺と巍こと〳〵く。當りかゝる見元見るべ野伏等ゝ案ゝ相遠〳〵で
一戦ゝも及ばして右往左往ゝ散乱も。慶幸喜實然もこそあること。軍旗
纏めて押けるゝ。猶ゝ光ゝも敵充満ぬと風聞頻りなるべ心ゝ〳〵も打せ
るゝ。是より後ゝ猶ゝの。豊和國へ着ゝ斯て菱形山の麓より。扨こと
取敢て後さ下漏さと攻れど。敵の乳城ゝ。怒と南の一方を明渡
さる。ゝゝ菱形山の城中ゝ由利新三郎朝通。三千騎諸ゝ〳〵りけゝ。城の
三方十重廿重ゝ。うち圍まる勢は方騎諸。野ゝも山ゝも充満て。鬨の声天地を
響ゝ。大山も崩るゝ。堤際迫く攻寄られ。姫ゝの籠ゝ城兵等を。を碎きて防ぎ
ども。入替るべ勢もなく。見こそせば限りもなく。大軍ゝ圍まれて。所詮もの

城を持脱へんと。怯ひるゝ思ひるゝ。或ひゝ〳〵十騎。或ゝ七十騎。或ゝ紛まて落去
ゝ。義を忘れて恩ゝ恩顧のゝ僅ゝ百騎ゝ斗を遺りける。斯て諸方の責ゝて。
後ゝ〳〵計なく。然らばゝの城を抗とて泉下ゝ恩を盡さんと。城の大将初奥。
剛物の具を脱捨て。生害せんと思ひ〳〵。今年ゝ歳の女子を。ゝ〳〵後ゝ選て
敵ゝ捕ゝ。憂目を見せんも心苦〳〵。ゝゝ樹て心易く。自害せんゝ〳〵へ
い。既ゝ彼女子を引捕へ突殺さんと〳〵。浮恩愛の羈ゝ〳〵れ。魂
抜て脱殼。目の前を心の迷ひ。悶然として居る所ゝ女子ゝ歳の稚児
あり。来ゝ東西の分ゝ〳〵ゝ。父ゝ景勢の只ゝ〳〵ゝ。歎き悲しみ。彼ゝ
黄縁藤ゝ〳〵ゝ泣叫ぶる。怨敵のさま。其処ゝ垂れる軍旗も。ゝの袖
浸〳〵ゝ。朝過心をゝ直に鳴咽ゝ。後ゝ〳〵ゝ。所詮道ゝ迷今ゝ
迷ひをゝて猶ゝ。若虜ゝ〳〵ゝ不幸のゝ人の和尊ゝ去来速ゝと

取直し刀の柄も砕るゝばかり。身を思へバ情なや。まだいとけなき稚児の二歳の折に乳母乳女の手に後れ其后ハ父を情として漸々と育揚し今日の日ハ如何なる神の祟りかや。親の身自ら殺さる武士の習俗とハいひながら斯る歎きの十寸鏡見へぬ過世の仇なりけん。と了海ハ猛き武士の心も弱り果て腸を断哀傷悲歎他の見る目も憐れなる。家の子岸ね十郎仲正らの郎党も皆諸共に鎧の袖を絞りけるが。結と思案して言けるハ奉るに頼りに痛へしくいまいまし。まづ一回降人になり。時の変を由緒へ仲正斗らひあらんとゆへバ朝通兒も斯ことのあるよりて仲正ハ頓て天の高櫓に登り。寄手の大将軍に寄りべき事のゆへ答るべき由使を一人賜りゆへと。高らかに呼ハりけれバ。両大将 好古 経基 聞あひ。誰を使に立らるべきと。命ありけれバ遠藤次郎貞長進ミ出て申けるハ。某罷り向べしとの人ハ是土井庄司が次男くあるひて。

汝ならバ仔細あらじ頃城中へ罷り越て。敵の動静を見て来れと命に資長まかり手勢わずか召具して菱形の城へ向ひけるが。城兵ハ威儀を正しく迎へて開て出迎へ頓て案内して書院へ通まる。城将由利新三郎朝通溌溌しく出迎へ其朝家へ對しなり。元来怨敵害心を抱くべき所謂なれの処。不慮に寄来て差向られし武門の習ひ防義なく由。防禦てゆへど今ハ弓折と力究りて既に討死と覚悟なくゆへど。稚きものゝ歎きゆかに心後し。彼の朝を顧ぞ願ふ貴意の計らひりてその罪責をでふ許しなバ。首を伸て降人に罷出べきよしなりとそゆへと余儀もなげに言しかバ。資長遂一回畢りて。その旨を大将へ言上なし。直に返答で申さんとそ頓て本陣に立帰り。此より具に言しかバ両大将評議ありし。吾々九州へ渡りて今日が日までさまる事なく是ぞ降人の始めなるが伏に辭さバ見懲てなくその後へ降人に出る者あるまじ。都て仁義を以て

善と云。速ふ許すべふ如ども。再城中へ弛向ひ給大将は許容のよう。意ふみ見べ
朝廷嫌ひ天ふ歎びて里で脱ろの法で外て一容ふ降人ふこそ出ふれ。あ大将
対面あり。先兆で悔く怨地ふ恐で翻ー。官軍ふ屠する条。誅ふ以く神妙。
故ふ是まで の罪咎で有め。職位誅罰の列ふ加へ。猶この後の忠ふ抽ふて
新恩もあるべきと。寛仁大度の計らひふ。朝廷猶ほ。二面服従の部後一容ふ
感服。ふ怒敵の思ふ翻ー。官軍令体の色で彰せり。斯てあ大将ふ菱形
山の城ふ籠り。兵衛職尉追討の計策で回さとける。備も都ふて西海の
職徳威職ふく追討使もやとく難義のよう関えるべ。法力でかをく追
罰せるべふ果敢さーろまとそ。諸寺諸山の貴僧ふ祈せて。大法秘法で
修せらるとける。中ふも敵山の明達ふ住吉神宮院ふ於て。昆沙門の法で行るる
けるる。第六日ふ当ふく。一ふの奇特で現ふるとける。純友純素の兄弟ふ方ふも

ふく壇上ふ頭まで。双方長柄の弾で引さげ。要時戦ふよと見えるとこそ。
ふも多門天悪魔降伏の尊容で現ー。左右の脇ふ純友兄弟で。手ふと
掴ふて獲麿壇ふ。獲りの中へ投入ふ明達ふの奇瑞で現て。凡等目ふ
線ふ伏ー。四衆驚盤迫きふ。ふと此より参ーるし。君ふ臣のことふ成関。
ふと特ふ恐ふ思さとける。ふの論ふ及ぶや去ぬる頃より純友純素緒共ふ宰府の
城ふ在けるる。城ふその中不和とふりて。純素自殺ふ二方で率く黒潮の流へ
獲りける。流ふふの記ふて関び追捕使力盡ふ引退き純ふ抵ふ者ふうとべ。
純友心ふ憑て生ー。日夜塩酒ふ耽りて。軍事ふ怠ふるるが如く。歌楽慌遊ふ
遂りけるる。松浦の千代と云ふ九歳ふ一の美女ふて家のよるへと宝及び。
純素人とりそとと成給ふ。竟ふ其身で購ひ得ふ。城中へ招ふと物訓る
者ふ。ど迎とて遣ーるべ千代ふ紅粉で粧ひ綺羅で飾りて。手物ふ捧げ

ゆゑ。ゆゑ。一日の薄暮私宅を出て宰府の城へと紛きけるが。路の左右は全く暮ぬ活る処か何者やらんうゑの樹立の蔭より。群と顯へ出さる。癖者九七二十人ばかり矢庭に駕を蒐るやどか。這奴狼藉ごさんなんと純素が為に若者共。拔合せて防げど不意とのひ者ばかりの事なれば悉いとまもなく逃走る。家物早しかの言甲斐なく下僕なるべ肝玉消し。主の家物ばかりを捨て遠くに逃散る。

この間かの癖者等は千代が家なる奥を擔げ出かくれ失せうけりとかの一人の下僕ありて蔭に隱れ。始終の容を窺ひ。奥を擔げ去る折から跡目に着てその住先を究めうけるに純友が館へ入りぬ。是ぬて此より純素に高しるべ。純素聞て大に怒り。我兄の天義に組し。矢石に當りて情まで自ら投城を把て緒方を切靡け。今九夜當家に屬し。威を西海に震ふ。偏に功績なり。然るに活る魔籠の挙動。最小事なれども。

第六　筑後國柳川城攻

附　右衛門佐純乘最期

斯てその年も暮て。天慶四年となりぬ。筑紫の賊軍いよいよ強く。官軍を豊前國菱形山に在城あり。純友は宰府に拠籠り。權亮純素は柳が浦に籠城して。呉魏蜀鼎峙の昔に異らず。斯てかの軍何時果べきともえぞ。ざりける。粤太宰大貳橘公頼は去年の暮より筑後國柳川に在城し。純友が舎弟右衛門佐純乘。指めいの千の兵を率て昼夜攻分ざる責うーうども。城中少しの弱る色なく。今は諸國の勢逃集りて寄手に一方ならず及びぬるとぞ。城中柳屋するとなり。力攻に成べき方損ずるのみなるべ食攻にする手べーとて。支えり後は遠巻にして。校て軍を出さざりしが。年も春未に

て、以前の恩を忘れず。純宗借恩ひけるに。その城は橘公頼多年の功でありて矢種兵粮。澤山に貯へおきたれば。食攻めにすべしと。

園部に日こゝを空しく送るに。見るまさに勇ましと思ふ折ふし宰府の使者。二月十一日に参着して。軍を止めて振るべしと。純宗いよいよ心を決し。組らべとの軍勢をりて。一當あてくくべしとその潜位を定めり。明れば天慶四年二月十二日。辰の刻に城へ押寄せ。開を作て責寄せ。純宗の心中を。城兵の討て出べきを紛れまく思ひ。城中へ火を掛さすべしと。あの手兵に命じ。故意と痛くも責付べしと。城兵に出よ。と罵り歌きうしろべ。城中の者。是を見て。情き敵の難言うるのを。誘出して追撃し。負ふりの見せんと。先く所に精谷庄司次郎恒雅。走り来り。打て出んとする。城門を押へ。旁卒示致さるる。抑當城糧盡て。やや二三日も脉へぐし。終

は敵寄べしと。此方より討て出。一方を打破れば。一まづ出開きあるべしと。既に評定あり。折ふし。敵の寄ることを僥倖され。城に終日金釵く。寄るの気力を労まさせ。申酉の刻に及んで。一出に打て出るべし。寄る敵北に及べし。

ようや敵北に及べしと。一方を打破り。菱形山と一所にあり。重ねく計器城巡らさるべき。惣大将のもん有り。旁鹿忽あるべしと。制しかれば一寄に。如何ぞもこの義絶るべしとて。高櫓より敵に射。江藤敵を防ぎけり。新中の下刻とのまべ時分に。よれぞ打て出よ。逆兵勝て二千騎。

裏に双べくに切て出る。猛威頗る猛に。四面に排べく見えまべ。驚服城中の兵共。死の狂ひに近出さるべと。少く色めき見えけるに。大膳大夫公彦及舎弟左京進敦貞。漂に敵の真中へ。振らぬ割て入り。四方八面に切て廻り。縦横に盡に蒐まべ。いよく敵に猛撃しく。崩まさてぞ入べに

伊賀守敦通
賊將
純來が
左の眼と
射抜

ける。寄手の大将純忠は陣中を蒐廻り。見苦敷体方の形勢。こと人城兵法く
とも。入替るべき荒手なし。退取挑て討やくと。大音声を下知すれど。崩れ立
る癖なるべし。四途路なるに。敗走を。とゝ敷貞の金弟。敵近所伊賀守敏通い
さまを強ろ。ゝ。ごとく。面奥百中の練士。是ゞ矢先を蒐るの命生るい
るうけを。箇より軍中を。まい。敵数手射て落しけゝ。今い敗を一筋逆
まり。通まより敵と射落さんと。此交彼処を見ゝ。敵の大将純忠い
ていさ痛く戦ひく。その労を休憩めん為。松の樹を頼ふ。扇ひゝて仕ひ
ゝ。士卒と物語して。ありゝ紙。敏通い俗と視て。ことゞを敵ごん
なれと。三人張の十三束三伏の矢をうち番ひきりくと。寄手の純忠遥の
拠めゝ。ゝも知ゝば在りまゝ。敏通思ふ。ど現ひ。ゝ。兵弁を切く
敵ゝ思ふ矢所を過ゝ。純忠ゝ左の眼を。射貫きゝ。ゝ。滝白く射

ゝ。矢所の痛痛ゝ。純忠二言ゝ。真倒ゝ馬より撞ゝ落ゝ
ゝ。敏通鏃を叩き矢叫びゝ。寄手の大将右衛門佐純忠を。一矢ゝ射留
ゝ。憤やくゝ大音声。とゝ。関ゝ城兵。勇を進を勝鬨作りを東西
南北より攻合を。寄手の兵ゝ一万騎。さゝも大勢ゝ。大将既ゝ
討ゝ。残党竟ゝ金ゝ。色を失ひ乱れ落ゝ八方へ逃散を。渇ゝ
ゝ。城兵ゝ追追追諸敵ゝ。敵ふく背城ゝ。干茲井原平内ゝ。者
純忠の郎党ゝ。崩を味方ゝ。五三町退き
けるゝ今ゝ。主従討を阿容ゝ。何面目ゝ。命ん。と大勢の中ゝ
一騎。取て返ゝ勝鬨ゝ。城兵の群ゝ中へ面も振ゝ叫ゝ蒐入。角
八方ゝ切撃ゝ。勝ゝ。ゝ。城兵も。井原ゝ。ゝ切ゝ。中城ゝ通ゝ
ける。井原ゝ猶も奮震を。敵の大将を組ん。死ん。八方へ眼配り。逆

廻りまどゐ當下の味方とのふ八一騎もあり。良もまとべ。左右より十騎二十騎雲合せ。井原と同じけて蒐るわどゐ平内さしも剛の者と。今八腕弛き力弱れ。

たゐ是まで。そと太刀の先をにゐ〻〻くく倒ゐ馬より墮て死たり。その上に組

覆ゐける官軍ハ職流ゐるゐも主の為ゐ潔く討死せ。その志ゐ感じた。涙紙

落さぬハあらけ。然と六數月の籠城も。で一時ゐ圍解て。國を出さる猛

虎ゐ森一威勢擬こと〻て凱陣ゐ〻り。

平將門退治圖會　六終